

# ロンドン大学SOAS図書館

## —サブジェクト・ライブラリアンの役割—

小林 富士子

### ●SOAS図書館における蔵書構築

ロンドン大学SOAS図書館はアジア、アフリカ、中近東に関する教育と研究を目的とし一九六一年に設立されたSchool of Oriental and African Studies (東洋アフリカ研究学院、以下SOASと呼ぶ)「設立当初はSchool of Oriental Studies (SOs)」のための図書館であり、ロンドン近郊の倉庫に保管している文献も含めると、現在約一二〇万冊を所蔵する。大学の教育および研究対象にあわせ、人文学と社会学の全ての分野を収集してきた。ヘイター報告書<sup>(1)</sup>(一九六一年)以降、ナショナル・ライブラリーとしてSOAS以外のイギリス国内の学生や研究者にも資料を提供している。アラビア語、中国語、日本語をキー言語とする大学の方針

にあわせ、これらの言語資料収集には予算を少し多めに取っている。現在ロンドン大学という組織は存在せず、SOASはロンドン大学を名乗ってはいるものの単独の大学であり経営も独立している。

学部の図書館はもたず、全ての資料をSOAS図書館に集めている。図書館では授業で必要とする資料以外の地域研究を対象としない資料の収集は積極的に行っていない<sup>(2)</sup>。収集対象外の資料は他の図書館を利用してもらうことにより、限られた予算を地域研究に充ててきた。イギリスのほとんどの大学図書館は、適用レベルの差はあるもののイギリス国内の大学に所属する教職員と博士課程の学生に対しても入館証を無料で発行し図書への貸し出しを行う (SCONUL Access<sup>(3)</sup>)。また、学部修士課程の学生にも無料で入館証を発行し

利用を許可する取り決めを他のロンドン大学図書館数館と結んでいる。徒歩三〇分の距離にある大英図書館の利用を勧めたり、インターライブラリーローンによりイギリス国内外の図書館から資料の借り入れを行うことで、SOASの収集範囲を超えた研究のサポートをしている。

### ●サブジェクト・ライブラリアンの役割

二〇一三年はなぜか日本の大学・研究所など、計四機関から「サブジェクト・ライブラリアン」に関する調査を中心とした訪問を受けた年だった。

SOASにおける「サブジェクト・ライブラリアン」は担当する地域または学科の全てに関わる。資料を選び、学内外からの問い合わせに答え、利用者向けのリサー

チ講習会を行い、助成金を探し、サブジェクト・ガイドを通し資料紹介やリサーチの方法を紹介する。本が書架にないと書かれたら探しにも行くし、ページが外れたと言われれば糊付けもする。ブログを毎日更新したり、研究成果を出版したりする人もいる。SOAS地域研究担当の場合はカタログもとる。ナショナル・ライブラリーとしてSOAS以外の研究者や学生のリサーチや要望にも対応する。部屋に籠って仕事をしている反面、学生や研究者に接する機会も多い仕事でもある。

一九九五年にSOASの日本・コリア研究資料担当として今の仕事を始めた。当時は他にアフリカ、古代中近東・ユダヤ学、中近東、中国、東南アジア、南アジアの地域研究担当に加え美術担当と人文・社会学担当が図書館の蔵書構築に関わっていた。私以外は全て二〇年以上その職にあり、重鎮的な存在感を放っていた。イギリスではサブジェクト・ライブラリアンはほとんど動かない。三〇年以上を同じ図書館の同じコレクションのために働き退職する人がほとんどである。コレクションのある階には担当とそのアシスタント

トのオフィスがあり、隣には参考図書室を置き、個々のコレクションを単位として図書館は構成されていた。一つの資料を巡ってどちらのコレクションに入るべきかという担当間の地域紛争もしばしばあったりと、良くも悪くも担当の個性が実によく反映されていた。

二〇〇五年、専門職レベルでのサブジェクト・ライブラリアンは不要ということで四人の強制解雇未遂の後<sup>(4)</sup>、サブジェクト・ライブラリアンとアシスタントというオフィス単位の運営からサブジェクト・ライブラリアン全員が同じ階の隣接する三つのオフィスで仕事を中央運営型に移行した。

現在は一人のサブジェクト・ライブラリアンが仕事を分担している。一九九五年当初の七地域と美術のポジションは維持され、一人で担当していた人文・社会学のポジションは法律、経済・政治、文化人類学・言語の三職に分かれた。それまでの地域毎に大学すべての学部と研究センターを支えるという方針から、学部毎にサブジェクト・ライブラリアンが担当する方針に移行した。実際には、学部は一一以上あるので、複数の学部を担当する場合もある。具体

的には日本・コリア担当が日本・コリア学部と関わって仕事をしてくことは変わらないし、日本研究センター、日本宗教学センター、コリア研究センターを通してそれぞれの学部の先生方や博士課程の学生と関わることも変わりはない。しかし、新たに加わった地域研究以外の学科担当が歴史、法律、経済など、それまで学部を対象とした資料説明が難しかった学部の授業に向くことができるようになった。また、現在の構造では、それまで地域に焦点をあてた資料収集の際には見落とされていた複数の地域を扱う資料も幅広く提供できるようになった。実際の仕事内容は一人が少しずつ違う。

●例えばアフリカ・コレクション

私はアフリカ担当と二人で二四平方メートルぐらいの部屋を共有している。日本・コリアとアフリカというのは不思議な組み合わせなのだか、論理的な理由はない。オフィス・アワーも予約制度もないので、来館者はいつでも質問に立ち寄れる。どちらかが不在の際は簡単な質問に限りお互いにか

バーし合う。

SOASのアフリカ・コレクションはアフリカ大陸全体をカバーしている。例外として、エジプトは中近東のコレクションに入る。国によっては英語・フランス語の資料はアフリカ・コレクションで収集し、アラビア語資料は中近東コレクションに入る等が、資料収集の方針として明記されている。人文・社会学全般を収集するコレクションの七五%が英語・フランス語を主体とする欧米言語である。言い換えれば、アフリカ諸言語資料だけでは研究が成立しないということでもある。日本語文献を使わなければ研究できないという日本学の状況とは全く異なる。

二〇一四年現在、SOASのアフリカ学部および語学センターで教えている言語はアフリカーンス、アムハラ、ハウサ、イボ、ソマリヤ、スワヒリ、ヨルバ、ズールーの八言語に限られるものの、図書館での収集状況は一〇〇言語を超える。アフリカ言語の資料に限り言語学と文学を中心に収集している。アフリカ担当は、諸言語の文献を購入することは難しいと話す。ほとんどの国に図書の出版流通システムがない。二〇〇〇と

も三〇〇〇とも数えられる言語を

全て収集することは不可能だろうが、少なくとも入手できる場合は言語を問わず一文献は資料として収集するという歴代の方針を維持しているとのこと。かつてのような、教職員が現地に赴いて図書購入を行うようなことはないものの、院生が野外調査で訪れた際に購入することによってのみ収集可能な国がまだたくさんあるのが現状だとも話す。数年前までは現地の業者に図書を購入して送ってもらうブランクセット・オーダーを利用したこともあるが、小説に偏る傾向があるので現在は利用していない。南アフリカ以外はロンドン、スウェーデンに拠点を置く代理店を通してアフリカからの出版物を選書し購入してきたが、頼りにしていた二、三の取扱店から連絡が途絶えてしまっているという。高齢の店主の後継者がいないというのが原因らしい。

同僚はアフリカ研究資料を担当するイギリスのグループUK Library & Archives Group on Africa (SOALMA) およびヨーロッパ諸国との連絡会ELIAS (European Librarians in African Studies) のメンバーである。



他機関のアフリカ担当との協力や意見交換なども大事な仕事である。このようなイギリスまたはヨーロッパ諸国の研究機関や博物館の資料担当者や団体はアフリカ以外の地域研究や研究分野にもあり、サブジェクト・ライブラリアン全員が外部組織とも関わって仕事をしている。

### ●韓国の試み

最近サブジェクト・ライブラリアンを巡って興味深い動きがあった。韓国は韓国国際交流財団を中心に海外の大学図書館をさまざまな面で支援してきた。図書への寄贈、データベースの経済的な支援など、韓国資料を扱うイギリス国内のほとんどの図書館が恩恵を受けて来た。二〇一三年八月、財団は初の試みとして欧州の大学図書館と公共図書館を対象とする図書館員雇用に関する経済的援助プログラムを発表。SOASでは一年間のプロジェクトとして、現在カードカタログを使ってのみ検索可能な書誌全てをオンラインカタログ化する職員の雇用のための助成を受けることになった。

続く一二月には、Global Library Internship Program (一

時的な名称)の可能性の調査を始めた。概要は図書館情報学の学位または修士号(博士号も可)を持ち、英語で仕事をするのが可能な研修生を韓国内から選抜し六カ月から一〇カ月欧州に派遣するというものである。海外の図書館で韓国学研究司書としての経験をすることにより、次の世代の専門家を育成することが最終目的であると明記している。財団はサブジェクト・ライブラリアンが韓国学に携わる研究者および学生にとつてなくてはならないものであり、適材を増やすことは韓国研究の世界的発展につながると記している。

現時点ではまだ可能性を調査している段階であり、SOASが研修の場を提供できるかどうかも未定であるが、インターネットの普及と検索機能の向上により資料の入手が以前よりも簡単になりつつある今、韓国研究の発展を担うのはサブジェクト・ライブラリアンとした韓国国際交流財団の新企画は興味深い。

### ●日本に期待する点

日本研究のための資料説明会をするとき必ず出る質問は「日本語雑誌のデータベースはありませんか」。

「答えはイエス&ノーです」と言い続けて既に一〇年ちかいか。SOASの必要とする人文社会学系のフルテキスト・データベースとなると紹介できるものがない。Cinii Articles-J-STAGEを紹介しているが、利用者はもっと包括的なデータベースを希望している。

資料説明会に集まる学生達は雑誌に関しては既にオンライン・データベースに移行している。本は伝統的な紙の「本」で読みたいという学生がほとんどというのがここ一〇年ぐらゐの反応である。今年の説明会では本もスクリーン上で読むという学生も少数いた。

日本語資料の検索も入手もはるかに楽になってきている。新聞のデータベースや参考図書のオンライン版も充実してきた。しかし、中国研究や韓国研究では提供可能なことが日本研究では提供不可の状態が長く続いていることも事実だ。「雑誌のフルテキスト・データベースが欲しい」「電子化の際にはDVD版やブルーレイ版ではなく、オンラインで提供してください。」欧米の日本研究担当が集う会では必ず耳にする希望事項だ。

たくさんの出版物のなかから必要とする資料を探し出すことは、時間がかかる作業であり、時にとっても難しい。全文データベースが望まれる一因でもある。現時点では索引データベースが収録する分野と内容には限りがあり、複数のデータベースを探しても拾えない文献がまだまだ多い。国際社会からの日本理解を深めるためにも、情報・研究資料へのアクセス向上は必須事項だと痛感する。

SOAS図書館でもデジタル化の作業が細々ではあるが行われている。優先されるものは貴重資料であり、それ以外の資料のデジタル化の予定は今のところない。戦前に発行された日本語雑誌も多数所蔵しており、紙の状況が大変悪いものもある。誰かがコピーをしたらポロポロと朽ちてしまうかもしれない状態のものもあり、今後のことを考えるとデジタル化が望ましいとわかっていても予算が足りない。海外の図書館からの視点では、このような資料は日本でデジタル化され、広く公開されることを期待してしまう。

日本研究資料の蔵書構築を考えると、SOASでの一番の問題は実は書架スペースである。日本研

究に限らず図書館全体が抱える問題であり、サブジェクト・ライブラリアンそれぞれには資料廃棄の圧力が上からかかる。学生数の増加にともない、館内の学習スペースが拡張され、結果として書架面積は減少し、今後更に減少する計画が持ち上がっている。倉庫も利用しているもののロンドンの地価は高い。利用されない資料は廃棄も考えてみてはと上から言われても、勿論そんな簡単な問題ではなく現時点ではそのつもりはない。倉庫に入れても支障がない資料のみを選択して入れるという方法ではなく、まとまったセクションとして入れるという方針のため、それぞれの担当は苦心もするし、利用者にも不便をかけている。

イギリスのほとんどの大学図書館は教科書を重複本として所蔵している。SOASもまた授業で指定された書籍は受講生の人数に応じて購入する。現在は重複本は一人毎に一冊購入し、最高一〇冊までとしている。ほとんどが英語書籍である。配架スペースの問題とできるだけ多くの学生が利用できるよう、最近では重複本は電子版の購入が可能な場合は電子版を提供するようになった。学生の反

応はよい。中国担当は書架スペースの問題を緩和するため、少数ではあるが中国語資料を紙媒体ではなく電子版に切り替えて購入を始めた。日本語学術書籍の電子版も最近増えてきているが、料金の設定が紙よりも高いことと、縦書のPDFをPCで読む際の不便さを考えると、まだSOASで導入できる環境ではない。日本語電子書籍の今後にも注目している。

### ●SOASブックシメンの今後の課題

二〇一二年のSOAS総学生数は五〇二九名。学部学生は総数二六一八名。そのうちアジア・アフリカ・中近東の言語習得のため、他の学生よりも一年長い四年をかけて卒業する予定の学生は約三二%。政策のため授業料が前年の三倍になっても新入生の数と割合はほぼ変わらなかった。卒業論文には地域の言語での文献資料の利用を課せる学部も多い。地域研究に焦点をあてた大学院生の数も少しずつ増えている。地域によっては、その地の言語資料を使わずには研究は出来ない状況は今後も変わらないということからも、図書館資料の収集方針に大きな方向変

換はないだろう。  
「グローバル」な視点から経済や文化を読む講座がSOASでも増えてきているが、グローバルであることはそれぞれの地域の深い理解が基にあるべきであるということから、図書館は従来どおり各地域に焦点をあてた資料を中心に集めている。限られた予算内で蔵書の全体的なバランスを考慮しながら現在と将来の需要を見極めて収集していく一方で、データベース購読経費の増加にともない、今までと同額の予算をそれぞれの地域研究に配分できるかは疑問だ。先にも触れた書架スペースの問題もあり、どの資料を集めていくのかという判断には益々厳密さが要求される。

(一)ばやし ふじこ / School of Oriental and African Studies, Subject Librarian)

#### 《注》

(1) Hayter Reportは一九四六年のスカーパーラ (Scarborough) 報告書に次ぐイギリスにおける地域研究の重要性と特別予算の割りあてを推奨したものの。  
GREAT BRITAIN. (1961).

*Report of the Sub-Committee on Oriental, Slavonic, East European and African studies.* London, H. M. Stationary Off. p.109

(2) SOAS Library collection development policy: <http://www.soas.ac.uk/library/about/collectiondevpolicy/> (2013.12.26)

(3) SCONUL Access <http://www.sconul.ac.uk/sconul-access> (2013.12.26)

(4) <http://www.theguardian.com/education/2005/nov/16/highereducation.cutsandclosures> (2013.12.26)

注) 六月の時点では美術と古代中近東を含む四人が対象だった。